ワノオト

森本ジュンジ

（人物）

緑渦巻姫
緑渦巻長
長官
緑将軍
赤渦巻長
赤妃
皇太子
皇子
右大臣
左大臣
船長
水夫１　水夫２　水夫３　水夫４
青渦巻長
青大臣
青将軍

―複数配役―

緑渦巻の兵達　・黒渦巻の兵達　・黒兵１

青渦巻の兵達　・連合軍の兵達　・死刑執行人
・青兵１　青兵２　青兵３　青兵４

赤渦巻の民衆達　・赤渦巻の兵達　・衛兵達
・水夫４の女房　・侍女達
・囚人の老婆　・囚人の息子
・赤兵１　・赤兵２
・民衆１　・民衆２
・衛兵１

（舞台装置）

装置を出来るだけ排したオープンステージ。
センター前面は平舞台。奥に雛壇。その檀上の上手から下手にかけては通路とする。

まだ薄暗い舞台の前面に、巨大な青渦巻の旗が垂れ下がっている。
静かな笛の音、聞こえる。
緑渦巻の刺青ををした男（緑渦巻長（みどりうずまきのおさ））、登場。
舞台上を笛を吹きながら歩き回る。
緑渦巻の兵達、登場。
笛を吹きながら旗の周りを取り囲んでいく。

やがて、彼らは笛の柄に長いリボンを結び出す。
笛の音、つんざくような鋭さに豹変。
緑渦巻の男、力づくで旗を引き落とす。
舞台、一気に明るく。

旗の下でうごめく人の群れが見える。
旗がはねのけられ、中から青渦巻の刺青の兵達、登場。
リボンをつけた太鼓を鳴らしている。
（争いの動きは、行進や身振り身構えといった単純なもの）
笛と太鼓の音、激しくぶつかり合う。
これは二つの国の戦である。

それぞれの兵達、相手と向き合い、音の勢いの劣る者が「死のポーズ」。
ポーズをとった兵、舞台上から退場。
優勢なのは青将軍が率いる太鼓側である。
生き残った太鼓達が周りを囲み、激戦中の太鼓を鼓舞していく。
やがて緑渦巻長が最後の一人に。

青渦巻長、青大臣を引き連れ、登場。
悠然と情勢を見守る。
緑渦巻長、ひざをつき、太鼓おさまる。

青大臣　「夜明けを狙った我が国への奇襲攻撃は、一国の滅亡をもたらした。
我らが国の象徴、青渦巻の旗を狙った代償はこうして自らが露と消えるのだ。
緑渦巻は本日をもって青渦巻の配下に下る」
緑渦巻長、雛壇の上に連行される。

青長　「方はついたか」
青大臣　「将軍、状況を」
青将軍　「はい、大臣。相手方は、ほぼ全滅に」
青長　「ほぼ」
青将軍　「恐れながら、長。残党の兵士がまだいくらか…」
青長　「このまま海を渡らせ逃がせというか」
青将軍　「直ちに追手を」

青長　「群ごと滅ぼせ」
青大臣　「長の仰せのままに」
　雛壇の上の兵士が声をかける。
青兵1　「将軍様、こやつ捕虜にしますか」
青長　「あいつはうつけか。（目くばせ）大臣」
　青大臣、雛壇を駆け上がり青兵1を乱暴にどかす。
青大臣　「この場で殺すぞ！
　忘れるな、この緑渦巻の長は我らの国へ襲い掛かってきたのだ。
　領土の中心に風穴をあけて！」
　数名の青兵、将軍の指図で雛壇に向かう。
緑長　「国敗れ、我が身死すとも、オミナエシ。咲き誇るなり、枯れる山なし」
青長　「辞世の歌とは時代遅れめ」
緑長　「栄華を誇るのも今のうち」
青長　「英雄を気取るな」
緑長　「我が市民は、成り上がりに復讐したまで」
青長　「黙れ、ファッショ！」
青大臣　「復習とは呆れた言い草」
緑長　「我々は領土を踏みにじられた」
青兵2　「その前に父母を殺された」
緑長　「その前に息子を殺された」
青兵3　「その前に兄弟を殺された」
緑長　「その前に親類を殺された」
青兵4　「その前に親友を殺された」
緑長　「その前に」
青兵5　「その前に」
青兵6　「その前に」
　青大臣、乱暴に緑渦巻長の顔を上げる。
青大臣　「ええい、やかましい！だからこそ今日終止符を打つのだ。
　この首をはね、戦の歴史に幕を閉じ、我らの教えを世界に広める。
　我らこそ最も崇高な思想を持ち、精神を持ち、力を持つ。
　我らの者の見る目がこの世の秤だ」
　青兵達の歓声が上がる。
青長　「始めろ」
青大臣　「死刑執行人！（言い捨て、雛壇を下る）」
　死刑執行人、儀式的にバチで床を鳴らす。

　緑渦巻姫、登場。
　傍らに宮内庁長官、少し離れて緑将軍が続く。
　三人の姿は青渦巻国の人々には見えない。
姫　「お父様ァッ！お父様ァッ！」

長官　「（制している）姫！姫！」
緑将軍　「（静かに様子を伺うのみ）…」
青大臣　「長、残る身内も直ちに処刑を」
青長　「一族は皆、始末したのでは」
青大臣　「いえ。娘がまだ一人」
青長　「姫が」
姫　「止めて！誰かお父様を。お願いです！」
長官　「姫、しっかりなさいませ。姫！」
緑長　「神よ。そなたに成り代わり、定まりし予言告げることを許したまえ」
姫　「お父様！こちらを向いて」
青大臣　「その娘、見せしめに幾日か民の前にさらしますか。
それとも連行して、即刻始末を」
青長　「（思案して）んん、女か…」
緑長　「己（おの）がすべてと思い込む哀れな輩ども。
たとえ我が身は消されても、必ずや第二、第三の緑渦巻国が現れ、
この驕慢の国を滅ぼすだろう。
憎しみの魂は永遠に受け継がれていくのだ」
青長　「ええい、気が散る」
青大臣　「やれ」
死刑執行人、太鼓を鳴らす。
緑渦巻長、死のポーズ。
姫　「（絶叫）お父様ァー！」
緑渦巻長と青渦巻兵達、退場。
青大臣　「新たな国づくりに影響を及ぼす古い芽は、毒出す前に摘み取らねば」
青長　「女か…」
青渦巻長と青大臣、退場。
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
姫　「（ほとんど呟き）お父様…お父様…」
長官　「姫！目を覚まされよ、姫」
姫　「（顔を上げ）長官…」
長官　「また同じ夢を」
姫　「夢…」
長官　「お気を確かに」
姫　「（安堵の表情）ああ、私…私…少しづつ頭の中が薄らいで…。
そうよ、私、気を失って。でも…その理由が何だったのか。
いえ、いいわ…そんなこと。
（嬉し気に辺りを駆け回る）これは確かに夢だったのね。夢だったのよ！」
姫、緑将軍を目に留め、動き止まる。
緑将軍　「姫、すぐにお支度を」

姫　「（じっと見つめ）…」
緑将軍　「（頷く）…」
姫　「（間）今、すべてを思い出した」
緑将軍　「地獄を告げるも無念。我が長は御隠れめされました…」
姫　「（泣き崩れ）ああ、やはり…」
長官　「（駆け寄り）姫」
姫　「悪夢です…」
緑将軍　「決して夢物語では」
姫　「分かっています…。分かって…」
長官　「将軍！少しは言葉を選んでお伝え申せ。これでは姫があまりにも…」
緑将軍　「選ぶ時間がどこにある」
長官　「それでもそなたは姫の許嫁か」
緑将軍　「お伝えしている私も辛い」
姫　「教えてください。この国は…緑渦巻国は滅んだのですか」
長官　「姫、ひとまず落ち着いて」
姫　「私、先刻までその報告を受けていたのよね。
でも、今度こそ気を失ったりしない。だから教えて。
この国は一体…。皆はどうなるのです。この国の民は」
緑将軍　「今は運命の赴くままとしか」
長官　「また、そういう暗ァい物言い。将軍というものは年中しかめ面でかなわん」
緑将軍　「国の苦境は我が身の苦境」
長官　「ふん、偉そーに」
緑将軍　「のー天気な道化とは違う」
長官　「僕は宮内庁長官だ！」
緑将軍　「ああ、そうだった」
長官　「姫がこの国をお離れになるという時に、どうして笑み見せ語られよう」
姫　「私が国を」
緑将軍　「苦渋の選択です」
長官　「それでも命はお救い出来る。
生きて残ることの出来る唯一の方法ではないか」
緑将軍　「だからこそ歯がゆい。姫をこの手で守れぬ軍人の口惜しさ」
長官　「おえ、だ」
姫　「あなたは一緒ではないの」
緑将軍　「はい」
長官　「その点はご安心を。僕がお供に参ります」
姫　「あの、それ…逆にはならないの」
長官　「姫ェ」
姫　「私が残るというわけには」
長官　「ああ、そういう意味…（激しく頭を振り）ブルブル、そんなこと」
緑長官　「それは断じて」

姫　「けれど、お父様はこの戦が終われば、あなたと共に国をつくれと仰って」
緑将軍　「残念ながら状況が変わりました」
姫　「けれど、お父様は」
緑将軍　「姫、何もお考えなりますな。（頭を下げ）万事、我らの言う通りに」
姫　「でも、私…」
緑将軍　「姫には生まれついての優しさは備えておられるが、国というものをまだ知らぬ。
これまで姫は長のお言いつけに忠実に従ってこられた。
私と婚約したのも長のお言いつけに従ったまでのこと」
姫　「それは…」
緑将軍　「恐れながら、私とて同じです。
長の御命令がなければ、あなた様と婚約の儀を交わすなど夢にも。
そのような相手に姫が御気を惑わされる必要はないのです」
長官　「うん。たまには的を得たことを」
姫　「今度はあなたが私の言いつけ役」
緑将軍　「今はただ、姫の御無事が何より大事」
姫　「どうしてこんなことに…」
長官　「戦なんか開いたからですよ。何もかも軍人が悪いのだ」
緑将軍　「この国の礎となるのが我らの務め。軍人ならばこの国のため命捧げる」
長官　「ね、こういう奴らなんです。性懲りもなくまだこんな。
こ奴らはいつだって反省というものがない」
姫　「あなた達…まさか、まだ戦を」
緑将軍　「もちろん」
長官　「頭が腐っておるのです」
緑将軍　「機会を待ち、同盟国に呼び掛けて」
姫　「いけません」
緑将軍　「大丈夫。寝首を掻いても青渦巻の長の首はとります」
姫　「戦はもう沢山！先の戦では母やお兄様がなくなり、此度はとうとう父までも。
血は流れ、多くの民が苦しんでいるというのに。
あなただって皆の嘆きを感じているでしょ！」
緑将軍　「このままでは緑渦巻国は滅んでしまう」
姫　「この国は汗して働くことも、花を育てることも出来ます」
緑将軍　「戦は長きに渡る我が国の歴史。それでも神は我々を見捨てはしなかった」
姫　「もう沢山。この有様でどこをどう見れば、この先、神の御加護が」
緑将軍　「こうして姫が生きておられます。長の血をひく王家のあなたが」
姫　「血…。私、それが怖い。自分の中に流れるこの血の意味が」
緑将軍　「怖い」
姫　「どこから来るの、この沸き起こる憎しみ」
緑将軍　「それでこそ緑渦巻魂。我らも気持ちは同じです」
姫　「いいえ。私はそれを抑えています、必死で」
長官　「姫…」

間。
姫　「逃げましょう」
緑将軍　「何ですって」
姫　「長官、あるだけの船を用意して」
長官　「あるだけ…」
姫　「この国の民、皆を乗せるの」
長官　「しかし、船などもういくらも…」
姫　「それならイカダを組んで。紐で結わいて男が漕ぐのよ。
ありったけ作って、病人や子供、皆を連れて行くの。
同盟国へ渡りましょう。難民として」
長官　「難民」
緑将軍　「姫、逃げることなど決して」
姫　「恥なら、すべて私が一人で負います」
長官、下を向いたまま動かず。
姫　「どうしたの。あなた、私の友達でしょ。さあ、早く言うことを聞いて」
長官　「姫がそのようなお考えをお持ちとは…」
姫　「急いで。大変な大仕事よ」
長官　「いや…それでは条件が」
姫　「条件…」
緑将軍　「我々はすでにかこまれておるのです」
太鼓の音、遠くから聞こえてくる。
姫　「あの音」
緑将軍　「あなた様をお助けするのが精一杯で」
姫　「分からないわ。説明して頂戴」
青将軍、兵士達を引き連れ、登場。
後ろに青渦巻の船長と水夫達、続く。
青将軍　「根性の名残はそれまで。約束の時は過ぎた」
姫　「あなた方、すでに条約を」
長官　「姫、それで皆の命も救われるのです」
緑将軍　「左様で」
青将軍　「引き渡せ」
緑将軍　「（頷く）長官、くれぐれも姫のこと」
長官　「もちろん」
赤渦巻の水夫達が姫を取り囲む。
姫、右往左往している。
青将軍　「さあ、行け！」
姫　「私、どうすれば」
緑将軍　「今はのむより他なく」
緑将軍、青将軍達に連れらていく。
姫　「将軍！」

波の音、殴り込む。
赤渦巻の水夫達、座り込んで櫂をこぐ動作を始めている。
これは船である。

姫　「昨夜、渦巻の中で私は眠った…。
ぐるぐるととぐろを巻く迷路の中を、一人さまよい歩いているのだ。
別の世界に触れようと、出口に向かって進もうとするけど、
とぐろは尚も渦を巻き、広がり続けていくばかり。
これは果てしがない…。そう思った時、私は気づいた。
そう、この渦には出口がないのだ。
そんな夢を昨夜、見た」

船長　「立つんじゃねえ！両手でしっかり船につかまれ！」
雷鳴轟き、照明、ＣＨＡＮＧＥ。
皆、激しく体を揺らされて、嵐の様子。

姫　「（しゃがみ込み）長官！」
長官　「ここにおります。じっとして」
船長　「振り飛ばされんな。静かにしてろ」
姫　「長官！」
長官　「今すぐお傍に」
船長　「動くんじゃねえ。（水夫に）お前ら、こいつを抑えてろ」
長官　「離せ！何をする」
水夫１　「手間をかけさせるな！」
船長　「女だ、女を押さえろ！こいつを落としちゃ何にもならねえ」
姫　「長官！」
長官　「姫に触れるな！」
船長　「黙ってろ、クソったれ！」
長官　「貴様ら、誰を…誰を乗せておると思うて」
船長　「死にてえか、ここでは俺が長だ！」
長官　「無礼者！（波に揺られ悲鳴）」
水夫１　「（長官を支え）この足手まといが」
姫　「長官！」
水夫２　「船長、大波だ！」
船長　「投げ出されんな！」
長官　「姫！姫！おお、神様助けて」
姫　「長官！」
船長　「（姫を捕まえ）危ねえと言ってんだろ！」
長官　「神様ァ！」
大波の音、一同バタバタと倒れていく。
雷鳴、ＯＵＴ。
静かな波音に戻る。
皆、弱ってほとんど動かない。

船長　「野郎ども、手足はつなっがってるか」
姫　「長官、もういいのよ」
長官　「（船にしっかりしがみついて）ひどい船酔いです…」
船長　「（笑）生きてる証拠だ」
長官　「日照り続きでツバキも出んわ…」
船長　「間違っても海の水を飲むなよ」
姫　「一つ聞こうと思ってたんだけれど」
船長　「何だい」
姫　「あなた、刺青の色が違うのね」
船長　「（水夫達と顔見合わす）皆、同じだぜ」
姫　「でも、青くないわ」
船長　「青。お前さん、どこへ向かってると」
姫　「どこって、青渦巻国に私…」
水夫１　「馬鹿言っちゃいけねえ。あいつらがそんな危ねえ真似するかい」
姫　「どういうこと…」
船長　「あんたを囲や、いつ何時あんたを助けに同盟国が戦を仕掛けてくるか」
水夫２　「青渦巻の連中は、いつだって他所の庭でしか戦はやらねえのさ」
水夫３　「それで俺たちの国にあんたを押しつけたんだ」
船長　「それが後方支援てやつでね」
姫　「後方支援」
水夫４　「おい、陸だ！船長、陸が見えました」
水夫１　「本当だ！陸が見えるぞ」
船長　「おお、間違いねえ！あれこそが我が祖国」
水夫２　「助かった！俺たち生き延びたぜ」
　皆、口々にバンザイを唱える。
船長　「だから、いつも言ってるだろ。俺の航海に帰らなかったためしはねえって。
　（小声で姫に）実んところ、今度ばかりは冷や冷やしたぜ」
姫　「ねえ、教えて頂戴」
船長　「何だい」
姫　「この国は、一体…」
船長　「ここかい。ここは、赤渦巻国」
　賑やかな三味線の音、入りくる。
　赤渦巻の民衆が楽器を奏で登場し、雛壇に座っていく。
　楽器にはリボンがついていない。
　竹竿に幾つもの提灯をぶら下げ、稲穂に見立てた巨大な飾りと国旗現る。
　踊りだす者も出て来て、水夫達を誘う。
　秋祭りの様相である。
民衆　「（掛け声）やれや！やれや！
　赤渦巻の！
　五穀の豊穣祝うでな！祝うでな！

やれや！やれや！
赤渦巻の！
天下の太平祝うでな！祝うでな！
やれや！やれや！
やれや！やれや！」
琵琶の音が加わり、赤渦巻長と赤渦巻妃が左大臣に先導されてくる。
雛壇の最上段へ上がる。
表彰所を持った右大臣が船長の元へ。
水夫達、船長の傍に整列していく。
賑やかなお囃子、おさまる。

右大臣「表―彰―状―！あなた様もあんさんもあなたもあんたも皆偉―い。
遥かな海を乗り越えて、行ってきました異国の地。
待ってるからねと手を振ったかわいいあの子も泣いている」
群衆から水夫４の女房が身を乗り出す。

女房「あんたァー！」
民衆、どっと笑う。

右大臣「よくぞ立派に任務を果たし、国の威厳を守られた。
よってここに栄誉を称え、表―彰―するものであります」
民衆の歓声上がる。
船長、右大臣から賞状を授与されるが、拒否して立ち去る。

船長「俺ァ、晴れがましいのは苦手だ」
水夫達が賞状を受け取ろうともみ合う。
民衆達の歓声、盛り上がる。

船長「（姫の前で足を止め）アンタには生まれついての運がある。忘れなさんなよ」

姫「船長、私、これから…」

船長「そいつは俺にも分からねえ」
船長、退場。

姫「さよなら」
騒ぎの輪の中から、若い男が抜け出てくる。

若い男「（姫の前へ）いつになくひどい盛り上がりよう。お疲れでしょう」

姫「（警戒）いえ…あの、はい…少し」

長官「こら、酔っ払い。気安く近づくと船酔いのゲロを飛ばすぞ」

若い男「酒は入っていません。（丁寧にお辞儀）ようこそ赤渦巻国へ」
右大臣、近づいてくる。

右大臣「若。皇子」

長官「皇子」

右大臣「案内は私、右大臣の務め」

皇子「しかし、放っておいては失礼かと」

右大臣「ものには順序というものが。
まずは功労者の労をねぎらい、それから長の御祝辞。その後…」

皇子　「姫は長旅でお疲れのご様子」
右大臣　「しかし、まだ式典も控えて」
皇子　「体を休めるのが先決」
右大臣　「皇子、我らには我らの流儀が」
皇子　「（踵を返し）父上に話そう」
右大臣　「（後を追う）お待ちなさい、皇子」
長官　「まさか、あれが長の一族とは」
姫　「民衆があんなに平穏に踊って。この国は緑渦巻とまるで違う…」

雛壇の琵琶が鳴り出し、赤渦巻長、立ち上がる。
皇子や民衆がかしこまる。

赤長　「（姫に）ようこそ赤渦巻国へ。
今日は年に一度の収穫祭。皆が喜び分かち合うめでたい日。
いつも酒に任せ、賑っておるわけではないので安心されよ」

民衆がどっと笑う。

赤長　「かつてこの国は戦に敗れ、一切を失くした。
焼け野原からすべてを起こし、新たな和の世界を創り出した。
これは我らの誇りである。
姫よ、とくとご覧になるがよい。この国の一員として歓迎しよう」

赤渦巻長、去ろうとする。

右大臣　「長、どちらへ」
赤長　「式典は取りやめ後日に。姫、まずはゆるりと休まれよ」
赤妃　「皆はお続けなさい。国中踊って練り歩け」

民衆、再び歓声を上げる。
赤渦巻長と赤妃、退場。

皇子　「父上はよくお分かりに」
右大臣　「若、どちらへ」
皇子　「私は姫のお部屋の支度を確かめる」

皇子、退場し、右大臣が後を追う。
民衆、踊りながら退場していく。

長官　「平和そのものの国だ」
姫　「こういう世の中もあるのね」
長官　「ひとまず安心。どうやら手厚く迎えられるようだ」
姫　「そうだといいけれど」
長官　「ご心配めさるな。ようやく落ち着くことが」
左大臣　「黙らっしゃい！」
長官　「ワァ、びっくりした」
左大臣　「長を御前に挨拶一つ申し上げず」
長官　「いや…我々はまだ事情をのみ込んでおらず」
左大臣　「事情など来る前から分かっていよう。
それとも、この左大臣の私から事細かに講釈が必要か」

長官　「何です、打って変わってこの態度」
左大臣　「立場をわきまえ物申せ。民にお荷物を受け入れたと悟られてはどうする」
長官　「お荷物ゥー！？」
左大臣　「何事も礼節、建前を重んじよ。我らへの恩義、努々忘れるべからず」
長官　「この国へひれ伏す芝居でも打てと」
左大臣　「芝居なものか。
　我らが青渦巻の意向を受け入れておらねば、お前達の命などとうに」
長官　「むっかぁ！」
姫　「大変、ご無礼を。今からでも遅くなければ、私、出向きまして」
左大臣　「今更もうよい。すでに長がお決めあそばされたこと、従っておれ」
長官　「（ぼそりと）結局、同じことではないか」
姫　「長官」
左大臣　「式典は明日にでも執り行う。追って沙汰を待て」
姫　「仰せのままに」
長官　「歓迎されておるのか虐げられておるのか分からん」
左大臣　「寝ぼけたことを。誰が歓迎の式典など」
長官　「ああ、いちいちムカつく。だったら、何なんだよ」
左大臣　「皇太子の御婚約の儀にあらせられる」
長官　「それなら、我らに関係なく勝手に行えばよかろう」
左大臣　「馬鹿者。当の相手がおらんでどうする」
長官　「相手…」
左大臣　「万事、これは政である」
長官　「おい…一寸、待て！」
左大臣　「そなたが我が一族に嫁ぐ」
姫　「私が…」
長官　「馬鹿な、そんな話は聞いておらん！」
左大臣　「当たり前だ。決まったのは今朝早く」
長官　「そんな勝手な」
左大臣　「青渦巻国の使者が参り情勢が変わった」
姫　「青渦巻の長の命が…」
長官　「姫、しっかり」
左大臣　「こちらとて、どこの馬の骨とも分からん相手を身内にしとうなど。
　長におかれては大事な跡取りまで政の渦に巻き込んで…。
　勝手なのはどちらだ。
　そなたの国の兵士が青渦巻の手から逃れ、挙兵せんと同盟国に呼び掛けておる」
姫　「我が国の兵士が！」
左大臣　「おかげで和を以て培ったこの国の秩序が今、脅かされて」
長官　「愚かな。また同じ繰り返しを！」
左大臣　「おおいに責任を感じよ。あらゆる国を巻き込んで、世界を揺るがしておるのだ」
声　「♪よう吠える！臆病な犬は（鳴き真似）」

左大臣　「（振り返り）誰だ」
　　雛壇の隅で酔った男が寝転んでいる。
男　「♪愚か者のー、か。臆病者のー、か」
左大臣　「いつからそちらに」
男　「♪群れをなしてー、か（笑）」
左大臣　「（心配げに近づき）こんな所で…」
　　衛兵1、登場。
衛兵1　「左大臣、青渦巻国の使者がお呼びで」
男　「（行け、行けと手を振る）♪しっぽ振るー」
左大臣　「（姫に）よいな、滞りなく準備いたせ」
長官　「おい、話はまだ」
男　「♪愚か者のー。臆病者のー」
長官　「待たんか、おい」
男　「（立ち上がる）♪群れをなしてー。怒涛の渦にー流されてー、か」
姫　「こっちに来るわ」
男　「♪我を失くしてー地に落ちる、か」
　　男、逃げる姫にまとわりつく。
長官　「こら、傍によるな。聞こえんのか」
姫　「（逃げる）長官」
男　「（笑）可哀そうに。同類あい憐れむだ」
長官　「無礼な。お前のような酒臭い輩が同類など」
男　「この国の人間となるのだろ」
長官　「否応なくだ。足かせをはめられてな」
男　「足かせなら我も同じ。ホラ、見えぬか」
長官　「さては罪人か。祭りの騒ぎに紛れて逃げ出してきたな」
男　「いや。我はいまだ牢獄の中。見よというのに、この足かせを（笑）」
長官　「ええい、浮かれよって。よくもまあみっともなく酔うたものだ」
男　「ああ、この世は全てぶざまで醜い。醜く酔うて狂気の沙汰じゃ」
　　男、行こうとするが、足がもつれて倒れてしまう。
男　「（笑）♪愚か者のー、か。臆病者のー、か」
　　皇子、再び登場し、男に気づく。
　　男も皇子に気づいて立ち上がり、再び大声で歌いながら、退場。
長官　「何者だ。無礼にもほどがある！」
皇子　「（傍に来て）何か失礼を…」
　　姫、反射的に皇子から身をそらす。
皇子　「どうされました」
長官　「鈍い奴！よくも企ての婚礼など」
皇子　「もうご存じで」
長官　「この国では万事、汚いやり口か」
皇子　「国の大事です。我らの身分が役に立つなら、むしろ喜ばしいこと」

長官　「人の心を道具に使って。気は確かか、これでは青渦巻の言いなりでは」
皇子　「道具など。これは和への協力です」
長官　「姫、どうして黙っているのです。
こんな男と一緒にさせられようとしておるのですぞ」
皇子　「お相手は私では。我が兄が務めます」
長官　「兄。さらに阿呆がおるというのか！」
皇子　「お会いになったでしょ。今、ここで」
姫　「今！？」
遠くで、先程の酔っ払いの歌声。
長官　「さらにショック…」
皇子　「あれが我が兄の皇太子です」
長官　「姫」
姫　「すべて私の知らないところで…」
姫、駆けだして、退場。
長官と皇子が後を追う。
踊りの民、再び戻り来る様子。
民衆の声　「赤渦巻国バンザーイ。バンザーイ」
照明、ＣＨＡＮＧＥ。

遠くで太鼓の音。
青大臣、青将軍と兵達を引き連れ、登場。
青大臣　「波の様子は」
青将軍　「良好です」
青大臣　「食料は」
青将軍　「積み込みました」
青大臣　「兵は」
青将軍　「すでに船で待機を」
青大臣　「半刻で出立と伝えよ。漕ぎ手に水をくれてやれ」
青兵１　「は（去る）」
青大臣、両手を広げる。
兵達、青大臣が身に着けた装飾品を外し、鎧をつけ出す。
赤渦巻長と左大臣、登場。
赤長　「祝いの酒もほどほどに。何ともお忙しい」
青大臣　「お招き預かり痛み入る」
赤長　「過度の祝いの品々。くれぐれも青渦巻の長へ御礼申し上げて頂きたい」
青大臣　「姫を受け入れ、身内にまでしたからにはひとまず安心。
これで、西の国々もむやみに攻撃しようとは」
左大臣　「青渦巻の意に従い、古くからの慣わしを変えてまで行った甲斐が」
青大臣　「何事も時の流れに沿うことが肝要。政を優先されよ」

赤長　「これからどちらへ」
青大臣　「二手に分かれる。私は長と合流。将軍達は黒渦巻国へ」
左大臣　「黒渦巻」
青将軍　「やっとのことで残党の行方が」
青大臣　「黒渦巻国がかくまっておるのだ。あそこは緑渦巻国とは遠縁だからな」
左大臣　「直ちに攻撃を…」
青将軍　「選択の余地は与えてやる。大人しく残党をつき出せばそれでよし」
青大臣　「緑国の将軍という若僧が一手にまとめているらしい。そいつさえ捕えれば」
赤長　「万が一の場合には、いつも通り我が国が物資の補給を」
青大臣　「そのことだが、今回はそれだけでは」
赤長　「と、申されますと」
青大臣　「私は今から青渦巻長と白渦巻、ピンク渦巻を回る」
赤大臣　「いずれも大国ですな」
青大臣　「我が国の長が、今最も気にかけておられるのは、
各国が今後も青渦巻に賛同するか否かの意思の確認」
赤長　「もちろん我らはこれまで通り大いに賛同を」
青大臣　「（近づき方を組む）分かっておる。そなたらに疑う余地などないことは。
しかし、九月に起きたあの攻撃は、新しい形の戦である。
一刻も早く反逆者を成敗せねば。そのため、此度は手を貸していただく」
赤長　「我らを戦に…」
左大臣　「しかし、我が国には戦を放棄する掟が」
青将軍　「今回の婚礼の儀の経験もある」
青大臣　「掟を新たにする前例は出来た」
青将軍　「近くこの地は各国の拠点となる」
青大臣　「何事も時の流れに沿うことが肝要」
赤長　「しかし…民の理解には多少の時間が」
青大臣、行くという合図を出す。
青将軍　「（兵に）出立の知らせを」
兵達、太鼓（リボン無し）を打ちながら退場。
青大臣　「各国を回った後、緑渦巻国へ向かう」
赤長　「緑渦巻に。まだ安定せぬのでは」
青大臣　「ところがそうでもない。民は何よりも安定と利を求める。
時代というものは常に流れ、常に動く。
婚礼の儀を早めたことで敵対感情は薄れた」
左大臣　「信じられん。このわずかな期間で」
青大臣　「私は懸念したが我が長の読みは正しかったようだ」
赤長　「と、申されますと…」
青大臣　「やはり、あの姫は使える」
一同、退場。
照明、ゆっくりとＣＨＡＮＧＥ。

琵琶の音、聞こえる。
ベールをつけ花嫁の装いをした姫、琵琶を弾く侍女達に連れられ登場。
侍女達、雛壇にレースのカーテンの衝立を置いていく。
それは、最終的に隔離された一つの部屋となる。
次に侍女達、姫の花嫁衣裳をとり、献上用の琵琶を差し出す。
赤妃、登場。

侍女1　「御妃様の御なりです」
赤妃　「（侍女達に下がるよう合図）ホンにここはよい風が吹く」
侍女達、退場。
赤妃　「あなたのお母様が亡くなられたのは、
先の戦でご長男が討ち死にされたご心労からだとか。
それが元でお父様は出兵し、その結果、あなたは私の身内となった。
数奇な縁という他ないわ。
巡り巡って私達は今、向かい合う。
それも運命、これも運命」
姫　「…」
赤妃　「まだ口を利かないのね、つぐんだ貝のように。
私の時がそうだった。
私の国は小国で、祖父の代にはまだ移動の生活をしていた。
米を育てて集落に落ち着いたのは、私の生まれる少し前。貧しかったのよ。
ここに嫁ぐ日、私は悲しくて泣きじゃくった。
どんなに小さな国でも私の国はただ一つ。
種もみと引き換えに売られるなんて思ってね。
あの日、誰とも口を利かず、この部屋から長の寝室へ向かったわ。
今のあなたのように」
姫　「…」
赤妃　「けれど、今では祖国はこの国に次ぐ大国に。
あちらでは私が伝記にまでなっているそうよ（笑）。
人生はいつも天秤秤。いつだって重い方に傾く。
分かるわね、あなたの気持ちがどうであれ、
この衝立を潜って皇太子の部屋に入るしかない。
（琵琶を差し出し）運命なのよ、お諦めなさい」
姫　「…」
皇太子、登場。
皇太子　「母上」
赤妃　「まあ、こんな所へ。この国では男の寝室に女を迎えるのが古くからの慣わし」
皇太子　「それが不自然というなら、花嫁の部屋に姑が居ついていることこそ」
赤妃　「いいでしょう…私はこれで退散します。

（琵琶を置き）稽古なさい。じきに上手くなる」
赤妃、退場。
皇太子「あの女の言うことは気にするな。
あれは実の母ではない。私は弟とは腹違い。
我が子に厄介が回ってきてはと取越し苦労しておるのだ。
我らの不仲を恐れてな」
姫「厄介」
皇太子「そなたはこの国にとって招かざる客。
平和の国に嵐の種を落としにやってきた。
それくらいはすでに気づいておるのだろう」
姫「そんなことを言いにわざわざ」
皇太子「客を連れて来た。（奥に声をかけ）入れ」
おそろしく派手な赤渦巻の身なりをした長官、登場。
皇太子「城の外をうろうろしていた」
長官「姫…お久しぶりで」
姫「（格好を見て驚き）どうしていたの」
長官「役場で観光ＰＲ課に任ぜられ…。派遣社員で」
姫「あなた、随分馴染んでいるのね」
長官「そう見えますか」
長官、懐から笛を差し出す。
長官「僕が作りました。あまり上手くはないけれど。
（涙ぐみ）姫、僕は姫に何の助けも…。どうかお許しを…」
長官、駆け出し、退場。
姫「長官」
皇太子「あの男も戦で親を亡くしたそうだな」
姫「寝室へならすぐに行きます。少し一人にして頂戴…」
皇太子「部屋には来なくていい。今日だけでなく、この先ずっと」
姫「（驚き）え…」
皇太子「この婚礼は形だけのもの。その身をささげる必要はない。
昼間の世界は終わった…。嘘で固めた見せかけの時間は。
言われるがままに世間を欺き、悩みなき夫婦を演じる…そんな時間は。
今は夜、せめてこの時だけでも仮面を外し、心持つ自分へもどるがいい。
安心せよ。侍女には口止めしておく。別々に寝よう」
姫「本当にそれで…」
皇太子「（頷く）依存なかろう、お互いに」
姫「私…あなたに誤解を。
初めて会った時からお互い口を利かなかったけれど、
私、あなたが反抗心のない、ただのお飾りだとばかり」
皇太子「誤解じゃないさ。その通りだ」
姫「そんなこと」

皇太子「私はすでに自分を失くした…。私には何の力もない。
私にとって一番大事なものを手放した時から、私の全ては消えた。
喜びも、希望も…愛も」
姫「愛…」
皇太子「私に愛などいらぬ。持てば失い、その穴を埋め尽くすのは悲しみと憎しみだけ」
姫「分かった。あなた、どなたか好いた方がいらっしゃるのね。
誰、いいえ、誰だっていい。
つまり、あなたはお逢いになりたいのよ。夜、仮面を外したその後、密かに」
皇太子「（頭を振り）そうじゃない…」
姫「いいの。私、形だけの妻になります。私は和が保たれればそれでいい」
皇太子「違うと言ってるだろ！」
姫「（驚き）…」
間。
皇太子「未来の扉の話を…」
姫「知らないわ」
皇太子「昔、旅芸人の一座が余興に聞かせてくれた。
未来に進む部屋にはいくつも扉があって、
そのうち一つだけを開くことができる。
ただし、開けたら最後、もう一度やり直すことはできない。
たった一度の機会…。
我々の未来の扉は他人に開けられた」
姫「他人に…」
皇太子「これから我々はただの人形。糸をつけられ踊らされる。
一切の自由は許されず、感情も…どこか遠くへ追いやられる。
私は間抜けなお飾りだ」
姫「どういう意味」
間。
皇太子「昼間、式の席上に青渦巻の連中が現れた時、そなたの顔つきが変わった。
あれが父や母を殺した奴らかと心の中に憎しみが宿ったな…違うか」
姫「（短い間）そうよ」
皇太子「青渦巻…緑渦巻…そして、そなた。元は一つの憎しみが次々と連鎖して。
こうして戦が始まっていくのかとその過程をまざまざと見ている。
（やや間）この国も戦に加わることになったぞ」
姫「そんな！」
皇太子「我らが民を戦へ導く役目に。
和の象徴から戦の先導者となったわけだ。青渦巻国への忠誠の証に」
姫「私が…戦の道具」
皇太子「先程の長官の姿、あれはこれから己の姿さ…」
姫「心を捨てよと…」
皇太子「その身もろとも。自分が自分でなくなっていくまで…」

姫　「出来ません！そんなこと」
皇太子　「出来ぬから苦しむことになる。（力なく息をつき）私には何の力もない」
　皇太子、去ろうとする。
姫　「何故、あなたは行かないの。行くべきよ、その愛する人のところへ」
皇太子　「（足を止め）…」
姫　「あなたの大事な人の元へ」
皇太子　「行くべきかな」
姫　「本当に愛しているなら」
皇太子　「彼女は死んだよ」
姫　「え…」
皇太子　「身投げしたのだ。我々の婚約が決まったその日に」
姫　「私がここへたどり着いた日…」
皇太子　「私には何もない。誰かを愛する心も、守ってやる力も…」
姫　「ごめんなさい…。私、何も知らなくて」
皇太子　「眠れ、眠れるものなら。朝の光で我らは魂を抜かれる…」
　皇太子、退場。
　間。
　姫、呆然と笛を手にする。
　照明、ＣＨＡＮＧＥ。

　遠くから足踏みする音。
　右大臣と皇子、登場。
皇子　「紳士淑女の皆々様ァー！新たなる時代の幕開けでありまーす！」
右大臣　「幕開けでありまーす！」
皇子　「我々、赤渦巻は大いなる一歩を踏み出さねばなりませーん」
右大臣　「なりませーん」
　民衆が集まる。
皇子　「恐れ多くも我が長より、重大なる御ふれであーる」
右大臣　「しかと心得て聞くがよろしい」
皇子　「なに、難しいことではなーい」
右大臣　「なーい」
皇子　「軽くことのすむ用件であーる。（早口）出兵じゃ」
民衆１　「（聞こえない様子で）え、何だって」
民衆２　「もう一度」
皇子　「出っ兵じゃ」
　民衆、騒ぎ出す。
右大臣　「しーんぱいするな。戦といっても我らは連合軍。
　ちょちょいとやってじき終わる」
皇子　「後方支援の延長と考えればよろしい」

右大臣　「なーに硬く考えるな」
皇子　「これは避けられぬ戦い」
右大臣　「ちょちょいと正義に加担をするのだ」
皇子　「そう、ちょちょいと。言ってみれば鬼退治」

民衆の怒号。
それを打ち消すように、三味線を演奏する衛兵達と赤渦巻長、登場。
軽妙なリズム（西洋風）。

右大臣　「紳士淑女の皆々様ァー！我々がお届けするホットなお知らせ！」

三味線が盛り上がる。

皇子達　「♪西の国で　悪党が
牙をむいて　テロの準備
それは大変だこうしちゃおれぬ

赤いリボン　柄につけて（楽器の柄にリボンをつけ）
船に乗り込み　鬼退治
東の海から西に向かって」

（メロディ、変調）
民衆に変装した赤妃、登場。

赤妃　「♪でも　待ってよ
一寸　待ってよ
この国では　掟が」

民衆　「戦の放棄」

（メロディ、元の調子に戻る）

皇子達　「♪国の掟と　皆の命
掟大事？　人よりも？
すでに世界は動き始めた
赤渦巻だけ　知らん顔して？
仲間外れは　まっぴらごめんだァ」

赤長　「（セリフ）かつて戦は孤立から生まれた。
孤立こそがすべての悪。かたくなに我を通すだけが正義では。
第一、我らが襲われた時、そんなことで他国が助けてれようか！？」

皇子　「♪そーだー」
右大臣　「♪そーだー」
護衛達　「♪そーだー」

右大臣　「イヤッホー！」

皇子達　「♪一致協力　　これぞ正義
迷うことは　　なーに一つ
世界が仲間だ　　さあ立ち上がれ

赤いリボン
柄につけで（楽器の柄にリボンにつけ）
船に乗り込み
鬼退治
東の海から西に向かって」

（メロディ、変調）

赤妃　「♪でも　待ってよ
一寸　　待ってよ
でもやっぱり　掟が」

民衆　「♪戦の放棄」
（メロディ、再び変調（浄瑠璃風））

皇子　「日暮れの空から舞い降れり
愛しや国の一大事
御魂は民に捧げしもの
心残りは愛しい姫の
寝顔の見られぬことばかり」

皇子達が義太夫となり、皇太子が人形の動きで口パク。

右大臣が姫を引っ張ってくる。
姫は琵琶を持たされ抵抗する。
義太夫続く。

右大臣　「何を仰る　　我が殿よ
国の大事が　　民の大事
いざ行きたもう　海渡り
いざ行きたもう」

姫、振りほどこうと抵抗するが崩れ落ちる。

赤妃　「（嘘泣きの歓声）素晴らしい！」
民衆、歓声を上げる。

音楽、賑やかに戻る。

皇子達　「♪一致協力　　これぞ正義
迷うことは　　なーに一つ
世界が仲間だ　　さあ立ち上がれ

赤いリボン
柄につけで（楽器の柄にリボンにつけ）
船に乗り込み
鬼退治
東の海から西に向かって！
東の海から西に向かって！
東の海から西に向かって！」

皇子　「右へならえ」
民衆が足並みを揃えて行進し出す。

民衆　「右　ならえ　　右　ならえ
右　ならえ　　右　ならえ」
長官が下手より飛び出してくる。

長官　「（大声で）戦反対！戦をやめろ！」
しかし、民衆の行進はもう止まらない。

民衆　「右　ならえ　　右　ならえ
右　ならえ　　右　ならえ」

右大臣　「法案、成立！」
赤渦巻長達、上手へ退場。
民衆、長達に続いて行進していく。
皇太子、うな垂れ雛壇上の下手、退場。
長官、叫び続けるが、衛兵に追いかけられ下手へ逃げる。
姫、自ら衝立を動かし部屋を作っていく。
照明、ＣＨＡＮＧＥ。

皇子、衝立に歩み寄る。

皇子　「よろしいですか」
姫　「（背を向けたまま）…」
皇子　「姉上、こちらに兄上は」
姫　「知りません」

皇子「先程から姿が。お耳に入れておきたい話があるのだが」
姫「聞こえたでしょ。ここにはいないの」
皇子「いけませんな。この数週間ですっかりおやつれに。
誰かに言って何か精つくものを」
姫「いらない。そんなもの」
皇子「他国からも兵が集まってくるのです。そんな調子では士気に関わる」
姫「この国はすっかり変わってしまった」
皇子「何、この状況も一時のもの。戦はじきに終わります」
姫「今日…街の兵士激励会にかり出された後、一人の兵に声をかけられた。
彼はこういうの。他国から嫁いだあなたがこの国のために戦っている。
自分は胸が震える。喜んで一身をを捧げます…」
皇子「頼もしい男だ。名を聞きましたか」
姫「あなたよりずっと若い青年ですよ！」
間。
皇子「すっかり私は嫌われたようだ。差し詰め悪の先導者といったところか」
姫「あなたの号令一つで皆が火中へ飛び込んでいくんじゃないの」
皇子「現実をご覧なさい。生き延びるためにはこうするより他。
今、我々にできることは戦の早期終結だけです。
周りは私を戦場から遠ざけたいらしい。だが、私は平気です。
この国のためなら私だってこの身、捧げます」
姫「私はそうやって死んでいった人達を何度も何度も見てきたわ。
国のためと叫び続けて、結局はただの犠牲に」
皇子「それは姉上の国が負けたからです。
負ければ最後。すべてを失う。何もかもです！
だからこそ、我々は負けられないんだ。何があっても、絶対に」
姫「本当にこの国は変わってしまった…」
皇子「ええ、そうです変わりました。今の私は戦に勝つことしか頭にない」
姫「出て行って！もう、うんざり」
皇子「いいでしょう。姉上に申し伝えだけして」
姫「あなたの言うことなど、もう何も」
皇子「いや。後になって何故、知らせなかったかとお咎めを受けても困りますからな。
今より長官を捕らえます。反逆罪で」
姫「反逆罪…！」
皇子「街で盛んに反戦運動を。始めは気持ちを察し、相手をせず過ごしてきましたが、
今では同志を募り、中には耳を傾ける者も出てきた様子。
こうなってはもはや目をつむっておくわけにも。
どういうわけかあの男、兄上もいたくお気に入りで」
姫「どうするつもり」
皇子「もちろん処罰します。反逆罪は軽い罪ではありませんからな。
今は民の気を引き締め、国中を一つにする時」

姫　「彼を脅しの見せしめに」
皇子　「困りますな、うがったとらえ方をされては。あの男は立派な国賊です。むしろ今まで目をつむってきた配慮こそ汲み取って頂きたい」
姫　「そんな勝手なこと」
皇子　「よろしいですね。確かに伝えましたよ」
姫　「待ちなさい」
皇子　「（足を止めず）今度は待てと。今、出て行けと仰ったばかりで」
皇子、上手へ退場。
姫　「皇子！皇子！」
長官の声　「姫」
姫　「！」
長官、下手の物陰から登場。
長官　「姫」
姫　「あなた、どうやって」
長官　「城内にある抜け道から」
姫　「そんなもの誰から」
長官　「皇太子から教わって。はなむけにと」
姫　「はなむけ」
長官　「私がこの国を出て行くからでしょう」
姫　「国を…あなたが！？」
長官　「姫、お迎えに上がりました」
姫　「出来るの、そんなことが」
長官　「仲間が船を。海を渡ります」
下手の物陰から船長、登場。
船長　「よう、早くしな」
姫　「船長！」
長官　「第一の仲間で」
船長　「この国の信念のなさにはヘドが出る。言ったろ、あんたには運がある。俺はそいつに乗ったのよ」
水夫達、同じく物陰からへらへらと笑顔を見せて登場。
船長　「手前ら、見張ってろって」
姫　「（長官の手を取り）本当なのね！」
長官　「これ以上、こんな所には。飛び出すのです」
姫　「どこへ」
長官　「世界へ。この世は戦に狂った民ばかりではありません」
姫　「ああ、神様。私にまだ光を…」
長官　「参りましょうご一緒に。同志を募り、戦を止める手立てを」
姫　「行くわ、もちろん。連れてって」
長官　「よろしい。すぐにお支度を」
姫　「この身一つで十分よ。（短い間）待って」

長官　「何です」
　部屋の隅から笛を取る。
姫　「これだけは」
長官　「（涙ぐみ深々と頭を下げ）姫、ご苦労を…」
姫　「何を言うの。あなたは私を見捨てなかった。さ、泣いてる暇なんか」
長官　「そういうとこ…そういうとこなんだよなァ」
姫　「夢じゃないのね、夢じゃ」
長官　「そうですとも。夢などでは」
姫　「夢じゃない！夢じゃない！」
長官　「夢などでは！夢などでは！」
　皇子、右大臣、衛兵、下手の物陰からリボンのついた琵琶を持ち、登場。
右大臣　「なるほど。この道を教えたか」
　姫達、固まる。
皇子　「どこから忍び込んでくるかと思っていたが、まさかここからとは。
　兄上にも困ったものだ。
　鼠め、城の周りは固めたぞ。右大臣、こ奴らを」
　右大臣、衛兵達に合図。
　衛兵達、抵抗する船長と水夫達を捕らえ、右大臣と共に退場。
長官　「仕組んだか。わざと我らを泳がせて」
皇子　「鼠は仕掛けを使って捕らえるもの」
姫　「皇子」
長官　「いいか、姫に関わりはない」
皇子　「無論。そのため私が直々に」
姫　「お願い。聞いて」
皇子　「姉上、弱りましたな、あなたにも」
姫　「これは私を思ってやったこと。責めは私が一人で負います。だから…」
皇子　「そういうわけには。あなたとこ奴では立場が違う。
　鼠、覚悟はよいな」
長官　「（後退りしながら）お、おう…」
皇子　「どこへ行くのだ」
姫　「許してやって。彼は気が小っちゃいの」
長官　「（身振り大きく）何を。志は大きいですぞ」
皇子　「その小っちゃな手足で世界を変える気か」
長官　「小っちゃい、小っちゃい言うな！」
皇子　「仲間はどこだ。脱走兵もいるだろう。今すぐ言えば命だけは助けてやる」
長官　「貴様らの手にかかったとあっては緑渦巻の名折れ。
　自らこの場で腹かっ切ってくれるわ。その武器を貸せ」
姫　「やめて。あなたも無理しないの」
長官　「いいえ、無理なんかじゃ。こんな馬鹿げた国には愛想が尽きた」
皇子　「我が国を侮辱することは許さんぞ！」

姫　「やめなさい！彼を討てば、街でふれ回るわ！あなたが見せしめに殺したと。
　この戦は何もかもでたらめだと」
皇子　「姉上、ごたくは沢山」
姫　「本気よ。私、言うわ！」
皇子　「そんなことをすれば、どういうことになるかお分かりか」
長官　「姫に手を出すな！」
皇子　「（長官に琵琶を向け）言われるまでもないわ」
長官　「殺せ。そうやって気に入らん奴は皆殺していくのだ」
姫　「あなた、それで平気なの」
長官　「平気ですとも。この国はもう誰はばかることなく戦の出来る国だ」
皇子　「誰が平気なものか！
　私は今、これ程まで自分の生まれついた境遇を疎ましく思ったことはない！
　私が傷ついていないとでも…。皆苦しんでいます。父上も私も！」
　皇子、琵琶を下ろす。
皇子　「分かっていたんです、いずれこういう時が来ることは。
　我が国を守る兵が支援の名のもと海を渡った数年前から。
　その後、地滑りを起こすように武器を持つことが許され、攻撃が許され、
　ついには犠牲者が出ることに」
姫　「それを分かっていながら」
皇子　「こうでもしなければこの国は生きていくことが出来なかったのです！
　姉上はご存じか。我が国の倉の中にはもう米がない。
　長年に渡り和を保つためにばら撒いたこの国の富はとうとう底を。
　それもこれも戦を避けるためじゃありませんか。しかし、それも限界です。
　私だって兄上や姉上のように世を嘆いて暮らしたい」
　左大臣、右大臣を払い駆け込んでくる。
左大臣　「皇子！皇子！」
右大臣　「（追って）左大臣、なりませんぞ」
皇子　「ここには誰も入れるなと言ったはず」
左大臣　「皇子に急ぎお知らせを」
皇子　「何事」
左大臣　「（苦し気に）皇太子が…」
皇子　「ようやく居場所が。すぐにお会いしよう。どこだ、ご進言致すことがある」
左大臣　「それが…」
皇子　「どうした」
左大臣　「海で身投げを…」
皇子　「…！」
　波の音、ＩＮ。
　皇太子、雛壇の上、登場。
左大臣　「岸壁から荒波の中に…」
皇子　「（近づき）馬鹿な！事故ではないのか」

左大臣　「（頭を振り）私どもが近づこうとした時、
傍に来るなと自らの首にリボンがついた撥を突き立て…」
皇太子　「未来の扉は無数にあって…」
左大臣　「次の瞬間、海に向かって…」
姫、悲鳴を上げて崩れる。
皇太子　「一つだけ開くことが…」
皇子　「馬鹿な…。馬鹿な…」
皇子の背中、震え出す。
左大臣　「兵には事故と伝え、極秘で亡骸を探すように。
しかし、海が荒れて一向に見つからんのです…！」
皇子　「（身体を震わせ）…」
左大臣　「この時期、潮の流れは速く。このままでは沖に流され二度と浮かんでは」
皇太子　「美しい未来…希望の未来…人を恋いうる輝かしい未来…」
右大臣　「皇子。長には私から、それとも」
皇太子　「私の未来は…」
左大臣　「皇子、すぐに捜索の増員を」
長官　「この国で最初の犠牲者が出た！」
皇太子　「何もない未来。何も…」
皇太子、雛壇奥へ消える。
波の音、最高潮の後、ＯＵＴ。
皇子、突然、笑い声を上げる。
声は止まず狂ったように笑い続け、やがて退場。
右大臣、後を追う。
左大臣　「赤子の頃より見守ってきた我が君が…」
左大臣、退場。
長官　「こんな所、もう沢山だ！」
姫　「…」
長官　「姫、行きましょう。今なら手薄になった兵から船長達を奪い返して」
姫　「（低く）国を捨てた…」
長官　「…」
姫　「自分を捨てた…。（笛を見る）魂を捨てた…」
長官　「姫」
姫　「私の未来の扉は…何もない未来と彼は言った…」
長官　「どうしたのです、姫」
姫　「言われるままに生きて…ただ生きて」
姫、笛を吹き出す。
長官　「姫！姫！」
姫、吹き続ける。
笛の音とクロスして、響く太鼓の音。
上手、下手より青渦巻兵集まりだす。

それにまぎれて姫達、退場。
照明、ＣＨＡＮＧＥ。
青渦巻兵達、一人また一人と座り出し、やがていく層もの船の形となる。
その中心にメガホンを持った青将軍が陣取っている。

青将軍「進め！進め」
青兵達「追え！追え！」
青将軍「探せ！探せ」
青兵達「進め！追え！探せ！追え！」
青兵１「将軍！」
青将軍「いたか！」
青兵２「あの島の陰に」
青将軍「確かか」
青兵２「間違いありません」
青将軍「ようし。（メガホン）黒渦巻軍に告ぐ！今度という今度はもう逃がさん」
青兵達「そうだ！」
青将軍「直ちに緑将軍を差し出したまえ。今すぐ出せば手荒な真似は致しはせん」
青兵達「そうだ！」
青将軍「我らは無益な争いなど望んでは。直ちに差出しなさい。（兵１に）水」
青将軍、渡された水を一気に飲み干す。
青兵１「待ちますか」
青将軍「阿保ゥ。今度逃したら我が国の長に申し開きがたたんわ」
青兵１「では」
青将軍「直ちに乗り込め（兵達に合図）」
青兵達、一歩一歩静かに近づく。
青将軍「黒渦巻の諸君、君らを責めようとは思っていない。
むしろ、よくぞ忠義を守り抜いたと褒め称えたい。
さあ、もうすぐ日も暮れる。決断されよ」
青兵達、陸に上がった格好で舞台中央へ集まり、戦闘の準備が出来る。
雛壇奥から白旗が現れる。
青兵１「白旗だ。白旗が出た」
青兵達「降参したぞ」
青将軍「ようし、姿を見せよ」
青兵１「どうします」
青将軍「この場で殺す」
雛壇上に白旗とスプレー缶を持った緑将軍と緑兵達、登場。
続いて尺八を持った黒渦巻兵達、登場。
青将軍「出ましたな、緑将軍！」
緑将軍、白旗にスプレーを吹きかける。
青兵達「緑だ！あいつ、緑の渦巻を描いたぞ」
青将軍「往生際の悪い。降参せん気か！ならば一気に始末を！」

緑将軍、遠くを向かって指さす。
青将軍　「（後方を振り返り）何だ…」
緑将軍、旗を振る。
周囲から鈴と伽藍の音が聞こえる。
青兵１　「（嬉し気に）あの音はピンクと白渦巻の」
青将軍　「おお、応援に駆けつけてくれたか」
鈴と伽藍の音、数を増やしていく。
青兵の一人、死のポーズ。
青兵１　「将軍！？」
青将軍　「（周囲に向かい）おおい、同士討ちだ！我らは青渦巻！同盟国であるぞ！」
鈴と伽藍の音。
青兵の一人、死のポーズ。
青兵１　「違います！奴ら、攻撃を」
緑将軍　「地獄から這い上がったぞ！神は我らに微笑みたもうた！」
傍らの兵達から歓声が上がる。
歓声　「緑将軍！緑将軍！緑将軍！」
黒兵１　「御覧なさい。皆があなたを賛美して」
鈴と伽藍の音、尚も高まり。
青兵達、後退していく。
青将軍　「退け！退け！退け！」
青兵１　「島の向こうから船が集まって…！」
青将軍　「はかられた…！」
歓声　「緑将軍！緑将軍！緑将軍！」
青兵達、緑兵と黒兵達に囲まれる。
（動きは技巧的）楽器の音、入り乱れる。
青将軍と青兵達、死のポーズ。
緑将軍、兵達の歓声を受けながら退場。

照明、ＣＨＡＮＧＥ。
上手から青渦巻と青大臣、登場。
舞台奥から青兵１のみ、逃げ出てくる。
青兵１、青渦巻長の前にひざまずく。
青長　「あり得るのか…そんな話が！」
青大臣　「青将軍は」
青兵１　「無念のお最期…」
青大臣　「信じられん。たかが移動の民に」
青兵１　「我らは策にはまったのです。追い込めば逃げ、追い詰めればまた姿をくらます。
緑将軍はそうして幾つもの小国へ渡り、そのたび少しづつ兵を逃して」
青大臣　「その一人一人がピンクや白渦巻の国々に同盟を持ち掛けたと」
青兵１　「その通り」

青長　「寝返りおったか！」
青兵１　「皆が緑将軍に加勢すると誓った様子」
青大臣　「恐るべきカリスマ…」
青長　「兵を集めろ！奴らはすぐに攻めてくる」
青大臣　「直ちに。（青兵１に）行け」
　　青兵１、退場。
青長　「それから早船を」
青大臣　「は」
青長　「赤渦巻へ走らせよ」
青大臣　「赤渦巻」
青長　「あの女だ」
青大臣　「あの女…。（気づいて）おお、姫か」
青長　「有無を言わすな。連れて来い」
青大臣　「なるほど。あの女を盾にすれば」
青長　「ここで使わんでいつ使う」
　　青長、青大臣、退場。

　　照明、ＣＨＡＮＧＥ。
　　波の音。
　　姫、笛を吹きながら登場。
　　後ろに長官と民衆が続いている。
　　上手より数名の赤渦巻の兵達、登場。
　　赤渦巻兵、手に長い棒を持ち、次々に地面を立てていく。
　　やがて、その棒は牢屋の格子であることが分かる。
　　姫や民衆は皆、投獄された囚人なのである。
　　船長達も囚人となり、その姿がある。
声　「ノー・モア・皇太子！ノー・モア・皇太子！」
水夫１　「自由だ！自由だ」
水夫２　「俺達は自由を求める」
水夫３　「俺達はちゃんと気づいてるぞ。隠したって無駄だ」
水夫４　「皇太子は国に殺された」
水夫１　「操り人形はもうごめんだ」
水夫２　「人殺しなんかになりたかねえ」
水夫３　「俺達は二度とリボンをつけないぞ」
声　「ノー・モア・皇太子！ノー・モア」
長官　「さあさ、皆さんレッスンの続きを。三味を奏でよ。姫の音と重なるように」
　　囚人達、三味線を奏でる。
　　囚人の老婆、長官の下へ進み出る。
老婆　「（拝み）ああ、姫様」
長官　「これこれ、婆さん。姫の邪魔を」

老婆　「噂を聞いてしゃしゃり出てきた次第で。
　実を言うと、息子が兵にとられちまって。
　お上に有無なく連れて行かれたが、ホンとのところ私や、後悔を。
　若い頃、あれだけ戦はもう沢山と心に誓っていたのに、結局は言われるがまま。
　息子が反戦運動でここに捕まったと聞いて、もういてもたってもおられんで」
息子　「（群衆から抜け出て）おっかあ！」
　　親子抱き合い、言葉を交わす。
老婆　「ああ、こうして巡り合えたのも姫様のお陰（拝む）」
姫　「その志がおありなら、私と一緒に音を奏でて」
老婆　「ええ。けれど…この年じゃ笛を覚えることが」
長官　「その点は気遣われるな。あんた方にはあんた方の三味がある。
　それを奏でよと姫は」
老婆　「でも…異なる代もんじゃ、音が交じり合わず」
長官　「いいや、違った音でも皆、一つに。
　大切なのは互いの音に耳傾け、重なり合わせていくこと」
老婆　「それは有難い。ナンマイダブ…ナンマイダブ」
長官　「お経はいいから三味を。婆さん」
老婆　「本当に良かった。あんたもただの非正規労働者ではなかったね」
長官　「暗い過去だ…」
　　音が重なり、メロディになりだす。
水夫1　「おい、どうだい。こんな感じで」
長官　「そう。そう。トレビアン」
　　右大臣、密かに赤妃を連れて、登場。
右大臣　「あれです。民衆の前で、ああやってひたすら笛を吹き続け」
赤妃　「立場もわきまえず、勝手な振る舞い」
右大臣　「このところ皇子が厳しく兵を招集したため、民衆の不満が高まり。
　次々と反旗を翻す動きを」
赤妃　「愚かな。今頃、反戦運動が何の役に」
右大臣　「噂が噂を呼んで、今では地方からも人が集まり出し。
　次々に捕えてはおりますが、その数予想を遥かに超えて、
　今や入る牢屋もパンク寸前」
赤妃　「あの疫病神。何故、笛を取り上げん」
右大臣　「取り上げても誰かが新たな笛を渡すのです。全くきりなく」
赤妃　「（兵に指図）牢を移せ。姫の傍に他の者を寄せつけるな」
右大臣　「すでに三度も移しております。
　しかし、その度、暴動が起き、集まる数も増すばかり」
赤妃　「放っておくよりよかろう！」
　　赤兵1、姫を牢から出す。
赤兵1　「新たにお移りいただく」
　　囚人達、口々に騒ぎ出す。

姫、笛を吹いたまま出てくる。
赤兵1、姫を連れて、退場。

赤妃　「おのれ、皇太子の死がこれほど国を揺るがすとは」
右大臣　「それも然り。ましてや長に至っては」
赤妃　「（頭を抱え）それを言うな…」

赤渦巻長、登場。
よろよろと廃人のように歩き来る。
後ろに左大臣が続く。

赤長　「潮が満ちる…潮が」
赤妃　「長…。そのような身なりで」
赤長　「満ちる…満ちていく。
あれに浮かぶは衣ではないか…。
皇太子のつけておった衣ではないか…」
赤妃　「危のうございます」
左大臣　「我が御子を亡くされ、ご自分を責めておられるのです」
赤妃　「あれからというもの…。長はこのように病に伏し、ご乱心」
赤長　「皇太子…何故にお前は…」

赤長、妃を振りほどき、よろよろと彷徨う。

赤妃　「長！」
左大臣　「おやめなさい。今や長には何も見えては」
赤妃　「さりとてこのまま放っておられるか」
左大臣　「このお乱れは御子を亡くされたためだけでは。
長はこれまで自ら進めてきた国づくりに心を痛めて」
赤妃　「長の政が間違っておったというのか」
左大臣　「いいえ、寧ろ長は実直だった。これまで先代達が定めたこの国の方向づけこそ」
赤妃　「方向づけ」
左大臣　「古より大国の仲間入りする事だけがこの国の悲願。
和を唱え、強い戒めを口にしながら、あらゆる矛盾をそのまま受け継ぎ、
結局、この国は戦に向かっていた」
赤妃　「そんな、戯言」
左大臣　「その結果が今の長の姿です。皇太子の死です。そして、この国の戦の復活」

皇子、背後から静かに登場。
暗く沈んだ瞳に鋭さだけが増している。

赤妃　「今更そんなこと！一国の行く末を導く者が、世の流れに逆らえるものか。
戦が嫌なら早う終わらせればよい」
左大臣　「まだ、このまま突き進めと」
赤妃　「当たり前。何ゆえに掟まで変えて」
左大臣　「民は矛盾に気づき出しております。矛盾は不振に。不信は不満に。
ここまで来れば、何れ怒りのマグマは破裂し」
赤妃　「それを止めるのがお前の務めであろう」

左大臣「長がこのような状態で誰が指揮を。民の動揺は高まるばかりですぞ」
赤渦巻長、再び戻ってくる。
赤長「水が…海の水が冷とうなってきた。皇太子はどこまで沖に出たものか。これではあれは凍えてしまう…」
赤妃「（泣き声に近く）長！しっかりなさいませ」
皇子「（近づく）兄上は凍えたりはしておりません」
赤妃「皇子」
皇子「兄上は静かな海で暖かく我らを見守り、国の行く末を案じております」
赤長「暖かく…。真か…」
皇子「兄上の遺志は私が継ぎます。そうすれば兄上は安堵して、亡き母上や愛しい恋人の元でゆっくりお眠りに」
赤長「ゆっくりとのう…おお、眠らねばの」
皇子「風が冷とうなってきた。父上はご静養なさらねば。さもないと兄上も安堵しかねます。よいですな、私にすべてお任せなさい」
赤長「あい分かった。我は休まねば…」
皇子「右大臣、お連れせよ」
右大臣「右大臣、お連れせよ」
赤長「は、はい」
「（呟きながら）休まねば…そう、休まねば…皇太子が心配するからの…」
赤渦巻長、右大臣に連れられ、退場。
赤妃「何故、お前が矢面に。放っておいてもこの戦はじき終わるのであろう」
皇子「（左大臣に）兵を集めよ。従わぬ者は容赦なく討て」
赤妃「皇子」
左大臣「討つ…。捕らえるだけでなく」
皇子「これまでが生ぬるい。やるからには徹底せよ」
左大臣「しかし、民にこれ以上の刺激は」
赤妃「そう。お前が恨みを買うことはない」
左大臣「今こそ冷静な振る舞いを。あなたの考え一つでこの国が天国と地獄に」
皇子、左大臣の胸に琵琶を向ける。
皇子「貴様も姉上にかぶれたか」
赤妃「皇子」
皇子「姉上はこうなっても和を唱えよと仰ったな！お前はどうだ、言えるか」
左大臣「ご容赦を…」
皇子「（琵琶を下ろす）事は急を要する。母上、青渦巻国が襲われました」
赤妃「青渦巻国が！？」
皇子「緑将軍の返り討ちにあった様子」
左大臣「それは真で」
皇子「青渦巻国より早船が。いきなり姉上を引き渡せと言う。それに、我が国で合流するはずのピンクや白渦巻の国々が未だ音信不通」

左大臣　「青渦巻国を裏切ったと」
皇子　「間違いない」
赤妃　「姫を手放せば、我らは」
皇子　「連合軍の攻撃の標的に。青渦巻国とは友好状態にあるわけですから」
赤妃　「それを分かっていながら、青渦巻国はあの女を引き渡せと」
左大臣　「我らを見殺しに…」
皇子　「元よりあれはそういう国。分かっていたことではあるが」
左大臣　「姫をどうするおつもりで」
皇子　「この状況で渡せるものか」
赤妃　「しかし、青渦巻の使者には」
皇子　「左大臣、兵を集めよ」
左大臣　「何をする気です」

皇子、左大臣に掌をかざす。
血で染まっている。

皇子　「逆らう以上、覚悟を決めねば」
左大臣　「早船の使者を！何ということ」

赤妃、泣き声を上げる。

皇子　「兵を！集めるためなら何をしてもよい」

赤兵２、駆け込んでくる。

赤兵２　「皇子、囚人達が暴動を」

背後の囚人達が騒ぎ出す。
皇子、牢へ向かう。
赤妃と左大臣、退場。
皇子、琵琶を鳴らし、威嚇射撃。
一同、どよめく。

皇子　「脅しではない。向ければ死ぬぞ」
囚人達　「…」
皇子　「お前達は武器を捨てるということで世界が治まり、
命を貴ぶなどとうわ言を唱えている。
しかし、それはまやかしである。
この世には紛れもなく争いがはびこり、武力の勝る者こそ結局、和を手にする。
今まではこの国に矛盾が向いて来なかっただけのこと。
一度、向いてしまえば…」

皇子、水夫１に一人に琵琶を向ける。

皇子　「出て来い」
水夫１　「（腰を抜かし）ひぃ…」
皇子　「（赤兵２）出させろ！」

赤兵２、水夫１を牢から出す。

船長　「何する気だ」
皇子　「お前達のまやかしを暴いて見せる」

長官　「皇子、やめろ」
皇子　「前に出よ。俺に向かってリボンを外した三味を鳴らせ（琵琶を向ける）」
水夫1　「（恐れおののいている）船長ォ…」
皇子　「鳴らしてみせよ」
船長　「やめろ！」
　皇子、逃げる水夫1を捕まえて倒す。
皇子　「ようく見ておけ！これがお前達の信じる幻だ！」
水夫1　「やめろ！やめてくれ！」
皇子　「音を鳴らせ。俺に和を訴えてみよ。それで相手が攻めをやめるか否か」
水夫1　「（恐る恐る鳴らし）お願いだ。助けて」
皇子　「もっと鳴らせ！鳴らしてみせよ！」
長官　「皇子」
皇子　「どうした。お前達の信念は何故、俺に届かん！どうして俺を止められん！」
水夫1　「（鳴らすのをやめ）助けて！」
皇子　「（低く）ダメだ」
　皇子、琵琶を鳴らす。
　水夫1、死のポーズ。
　囚人達、静まり返る。
皇子　「改心して国に従う者は、即刻ここから出してやる。よく考えて申し出よ」
　皇子達、退場。
　波の音。
水夫2　「（ポツリと）武器には勝てねえよな…」
水夫3　「俺、ちいと頭が冷えた…」
水夫4　「俺も…」
女房　「通じないんだね、アンタ…」
水夫2　「このまま死ぬのか、俺達…」
水夫3　「どうする…」
長官　「何を弱気なことを！」
船長　「馬鹿野郎が！いばらの道は覚悟の上だろ。ここでくじけてどうする」
　誰も応えようとしない。
水夫2　「海の向こうが暗くなってきたな」
水夫3　「一雨くるか」
水夫4　「いや…。あれは雨雲じゃねえ」
水夫3　「何」
水夫4　「船だ！それもすごい数。あんな大群見たことねえ」
水夫2　「見ろ、黒の旗だぞ。黒渦巻国だ」
水夫3　「ピンクや白の渦巻も並んで」
水夫4　「俺達を責め込みに来たんだ！黒渦巻国が軍勢を引き連れて」
　雛壇が左右に開く。
　緑将軍率いる連合軍、登場。

幾艘もの船が並ぶ格好。
尺八、鈴、がらんの楽器が入り乱れて鳴らされている。
左大臣が上手から下手へ走り抜ける。
左大臣「集まれ！即刻、集まれ！」
赤渦巻長、琵琶にリボンをつけ、登場。
後ろから赤妃が追ってくる。
赤長「海を…皇太子が眠る海を…。あれでは静かに休めん…」
赤妃「長、いけません。長」
赤渦巻長、赤妃に連れられ戻っていく。
連合軍の兵達、その場に座り、待機。
赤兵1、姫を引き連れ、登場。
棒を突き立て、姫を牢へ入れる。
マントを羽織った男、登場。
男「招集命令だ」
赤兵1「ここは」
男「俺が命を受けた」
赤兵1「そうか（去ろうとする）」
男「鍵をくれ」
赤兵1「（戻り小声）三本目の格子を引け」
赤兵1、去る。
男、マントを取り、緑将軍であることが分かる。
緑署軍「姫…」
姫「将軍」
緑将軍、三本目の格子を外す。
緑将軍「（頭を下げ）大変なご苦労を…」
姫「どうやってここへ」
緑将軍「この国へ入り込むなど、子供の使いよりたやすい」
姫「攻め込むのは、もっと容易いと」
緑将軍「元より高い玩具を持った子供のような軍隊。攻めれば半刻と持ちますまい。参りましょう。新しい国づくりが姫を待っています」
姫「私はここに。争いの片棒を担ぐことなどご免被ります」
緑将軍「あなたはこの国の人間ではない。歴とした緑の血を引く長の御子」
姫「国々の和を取り戻せるなら、私の過去など断ち切ります」
緑将軍「この国の和は口先だけ。
その証拠にご覧なさい。浜にはあれだけの兵が」
姫「あの引き金を引かせるのは、あなた次第」
緑将軍「（笑）私に脅迫するのですか。
さすが和が姫、いや、むしろ安心しました」
姫「この国と契りを」
緑将軍「ピンクと白渦巻が一挙に青渦巻へ攻め入って。

青渦巻はあとわずかな時間で陥落します。
今まさにこの世の秤が変わる時」
姫　「この国は争いを望んでいません」
緑将軍　「この国が死のうが生きようが私には一向、興味がない」
姫　「それなら攻め込む必要もないはず」
緑将軍　「さりとて放っておくのは危険です」
姫　「武器を捨てさせます」
緑将軍　「正気ですか」
姫　「（笛を出し）これを」
緑将軍　「先程、ちらと音色を聞いて…。よくぞ我らの魂を捨てずに」
姫　「これは和の証。リボンを外せばただの道具です。
これで皆の音を一つに」
緑将軍　「（やや間）そんなことをしておいてでしたか。
だが、それは無理ですな」
姫　「もし出来たら」
緑将軍　「無理です」
姫　「この国と和の契りを」
緑将軍　「姫、無理なのです」
姫　「私、命をかけています」
緑将軍　「どういう意味です」
姫　「あなた達が攻め込むにしても、和を受け入れるにしても、私は前線に立ちます。
あなた達が攻め込んできても、私はこの笛にリボンをつけません」
緑将軍　「姫…」
姫　「本気です」
間。
緑将軍　「仕方ない…。一度、船に戻らねば。
緑渦巻が投降したと聞けば、同盟を組んだ他の国々も理解してくれよう」
姫　「（喜び）お願い」
緑将軍　「ただし、あなたをお連れするのが条件です。
その後、この国がどう出てくるか。それは彼らの運命次第」
姫　「今、私が離れたら、皆は信用など」
緑将軍　「それでは話にならん。私はあなたに戻って頂かなければ何の意味も」
姫　「では、あなた方が武器を下した後、私自ら、あなたの元へ向かいます」
緑将軍　「その後、ここへは上陸しますよ」
姫　「上陸した後、手荒な真似をしないと誓って」
緑将軍　「あなたの顔を立てて誓いましょう。しかし、当面は我々の監視下ですぞ」
姫　「属国などせず、いずれ解放するなら」
緑将軍　「やれやれ、仲間もこの申し出には驚くだろう。
しかし、よいですか。一人でも我らを攻撃しよう者が出た、その時は」
姫　「分かってます」

緑将軍「今度こそ我らの元へ来ていただきます」
姫「いいでしょう」
緑将軍「困ったお方だ（行こうとする）」
緑将軍、足を止め。
緑将軍「しかし、本当にそれが出来れば…。
奇蹟ですな」
緑将軍、退場。
姫、牢を出る。
皇子、登場。
皇子「どちらへ」
姫「皇子」
皇子、姫に近づいてくる。
皇子「御覧なさい。運命の行く末があの海に」
姫「いつからそこに」
皇子「少し前から」
姫「何故、訴えに来なかったのです」
皇子「訴える。何を」
姫「彼に私達が争う気のないことを」
皇子「よし分かったと、船を引き上げ出ていくとでもお思いか」
姫「彼の話を聞いていたのでしょ」
皇子「信用など出来ません」
姫「話もせずに破滅の道へ向かう気」
皇子、姫の胸元へ琵琶を向ける。
皇子「これでも、それが言えますか」
姫「（毅然と）言えます」
皇子「向こうは本気ですよ」
姫「武器を持たない私を襲えば、今度はあなたが非難を」
姫「脅しですか」
姫「いいえ。真実」
間。
皇子「（琵琶を下し）やめておきましょう」
姫「あなたはちゃんと知っている。武器を使ってもこの国が変わらないことを」
皇子「いいえ。あなたがこの国の毒婦となるなら、その時は迷わず撃ちます」
姫「毒にならとっくになっているんじゃなくって」
皇子「これまでのことを差し引いても、あなたはまだこの国に必要だ。
これは簡単な算術です」
姫「私を盾に」
皇子「あなたに残された役目は今やそれだけ」
姫「なりましょう、盾にでも何でも。ただし、和を訴えて。
世界は狂った民ばかりではありません」

奥で鋭い笛の鳴る音。
弱弱しく三味線の乱れた音。
皇子「（舞台奥へ見に走り）逃したか！」
姫「あなた、彼に追っ手を！？」
皇子「畜生！」
舞台奥に緑将軍、登場。
連合軍の兵達、立ち上がる。
緑将軍、兵達を制するように船に戻り、座らせる。
皇子「これで奴らも本気で攻撃を仕掛ける」
姫「何故、こんな無謀な真似を」
皇子「我々が武器を捨てれば全滅です」
姫「和を唱え争いを放棄した国は、この世で初めてのことだったのに。
そんな国が争いに乗り出せば」
皇子「何だというのです」
姫「滅びます。信念を持たない国はもはや国ではない。
これは簡単な算術です」
皇子「あなたの夢物語で国は救えんのですよ。絶対に。
忘れてもらっては困る。
この一連の争いは、あなたの国が起こした戦から始まったということを」
姫「だからこそ、私は立ち上がる。
恥じています。何もしてこなかった自分自身に。
私は皇太子と同じ。口先ばかりで和を願っていた…」
皇子「（激して）兄上の話はやめて頂こう！」
姫「あなたにもまだ残っていたのね。人の心が」
皇子「茶化すんじゃない」
姫「いいえ、真面目よ」
皇子「兄上は自らに絶望したのだ。希望の未来に限界を悟り…。
理想に執着するあまり、生きるすべを」
姫「違うわ。彼はそれを持たず現実から逃げた。
彼の理想を一番信じていなかったのは、誰でもない皇太子自身」
皇子「兄上を侮辱する気か」
姫「これも真実。受け入れなさい」
皇子「あなたに兄上の何が分かる」
姫「彼は逃げた。多くの責任と民を捨てて」
皇子「兄上ほど心の美しい人はなかった」
姫「そうよ。美しく、そして弱かった」
皇子「…」
姫「あなたもそう思うのね」
皇子「思わん」
姫「嘘」

皇子　「嘘なものか」
姫　「今、分かった。あなたは自分が皇太子を追い詰めたと思っているのね」
皇子　「馬鹿な」
姫　「自分で自分を責めながら、皇太子の影におびえている」
皇子　「私は、国の礎にさえなれたらそれでよかった！
兄上の創る国の力に。父上の助けに。
彼らは血筋の違う私を彼らは自愛で受け入れた。
私は一度も傷つくことなく、愛に満たされ生きてきた。
だからこそ、家族としての恩に報いたかった。
誰よりもこの国のために尽くそうと」
姫　「可哀そうなのは、そんなあなた一人の感傷のために巻き込まれた物言えぬ民」
皇子　「あなたの方こそ、ただの理想だ。
こめかみに武器を突きつけられても尚、和を唱えることなど人間には出来ない」
姫　「出来るわ。同じ命を懸けるなら、どうして、そちらに懸けない」
皇子　「もう結構！それ以上言えば、今度こそ（琵琶を向ける）」
姫　「やれば。物言うために私は立ち上がる。
私はようやく自分に流れる血の意味がそこにあると気づいた」
姫、笛を吹き出す。
皇子　「やめんか！こんなもの（笛を取り上げる）」
姫　「この戦、止めてみせます」
赤兵２、登場。
赤兵２　「兵が揃いました。囚人達も皆、リボンをつけ直し」
皇子　「（笑）御覧なさい。所詮、人間なんてこんなもの」
姫、歌声を上げる。（ハミング）
皇子　「ええい、往生際の悪い」
姫、歌い続ける。
皇子　「（姫の手を引っ張り）来るがいい！お望み通り、あなたは我らの盾になる」
波の音、ＩＮ。
皇子、姫を舞台前面に連れ出す。
囚人だった赤渦巻兵がリボンをつけた三味線を持ち、上、下手より登場。
牢の格子、取られてなくなる。
背後の連合軍の兵達、立ち上がる。
右大臣　「兵が集まりました」
長官と船長が連れてこられる。
長官　「姫」
皇子　「突き出せ。長官、最前線部隊だな」
長官　「僕らは二度とリボンはつけん」
皇子　「勝手にせい。姫を前へ！奴らはすぐには手を出せん。
（兵達に）構えよ」
姫、再び歌い出す。

皇子　「やめんか」
　船長、姫の声に合わせ歌い出す。
皇子　「黙れ！馬鹿者」
　姫、更に声を上げる。
　赤渦巻の兵達がざわめきたつ。
　左大臣、列の前に出てリボンを取る。
皇子　「貴様！一度、助けた命を」
左大臣　「皇子、あなたも今一度、この方の姿を見るべきだ」
　姫、声を高める。
皇子　「やめよ姉上。それ以上やれば本当に」
姫　「私を信じなさい。
　放て！海原に和の音を」
長官　「姫の言葉に従え！皆、争いで血を流したくなかろう」
皇子　「許さん。リボンを取った者は即座に殺す！」
船長　「やめるんだな。この国はもう一度、和を取り戻そうとしている」
皇子　「黙れ！国を滅ぼすつもりか」
声　「やめろ！消えちまえ」
皇子　「誰だ…。どいつが言った！」
声　「お前のご託はもう沢山！」
　所々でリボンが放り投げられる。
皇子　「命令違反だ！処刑するぞ！すぐにリボンをつけなおせ」
左大臣　「皇子、あなたの負けだ。皆が信じたのは、（姫を見て）あちら」
皇子　「（左大臣を振り払い）騙されるな！相手はリボンを外さんぞ！
　姉上、アンタはこの国を破滅に」
　皇子、姫に琵琶を向ける。
　囚人達、どよめき。
長官　「やめんか、皇子！」
皇子　「動くな。裏切者め！」
　姫、歌い続ける。
　右大臣、皇子に向け三味線を鳴らす。
　皇子、肩を撃たれた格好で倒れる。
右大臣　「お許しを。こうするより他…」
皇子　「殺せ」
左大臣　「（皇子のリボンを外す）お考えを新たに」
姫　「皇子、あなたも鳴らすのです」
　皇子、振り払い背を向ける。
　突如、連合軍から鋭い楽器の音。
　囚人達が悲鳴を上げる。
姫　「（連合軍に）待って！これは内輪のもめ事。そちらを攻め込む気持ちはない！」
　姫、より前に出て歌い出す。

長官　「姫、危ない」
姫　「早く！皆、奏でなさい」
船長　「もたもたするな！手前ら、生きたいんだろう！」
　長官、笛を吹く。
　連合軍から音が聞こえ始める。
左大臣　「連合軍が」
長官　「応えて来たぞ。どうした、おい。こっちも三味を鳴らせ！」
　赤渦巻、三味線を鳴らしてみせる。
　連合軍、それぞれの楽器を鳴らしてみせる。
　赤渦巻、三味線を鳴らしてみせる。
　連合軍、それぞれの楽器を鳴らしてみせる。
　やがて、互いが音を重なり合わせる。
長官　「やったァ、音が重なり出した！」
　緑将軍、手を振っている。
　姫と長官、手を振り返す。
　互いの重なる音、最高潮に。
　赤渦巻長、登場。
　赤妃が止めようと続いている。
赤長　「おのれ、皇太子の海を荒らしおって。立ち去れ！（連合軍に琵琶を向ける）」
赤妃　「（止めようと）長、いけません！」
　傷ついた様子で漕ぎ近づく黒渦巻兵達の早船、緑将軍の元に登場。
黒兵1　「申し上げます！青渦巻に向かったわが軍の兵、すべて返り討ちに…！」
　それぞれの楽器の音、ＳＴＯＰ。
　皆、振り返る。
赤長　「出ていけェ！」
　姫、赤長に気づいて両手を広げ制しようとする。
　赤長、琵琶の動作、ＳＴＯＰ。
姫　「昨夜、渦巻の中で私は眠った…。
ぐるぐるととぐろを巻く迷路の中を、一人さまよい歩いているのだ。
別の世界に触れようと、出口に向かって進もうとするけれど、
とぐろは更に渦を巻き、広がり続けていくばかり。
これは果てしがない…そう思った時、一点の光を見つけた。
すがる思いで道を進み、光の先に着いた時、私は気づいた。
渦巻の外にようやく出たのだ…。
そんな夢を、昨夜見た」
　赤渦巻長、琵琶を鳴らす。
　姫、死のポーズ。
長官　「姫ェ！」
　背後から聞こえてくる太鼓の音。
黒兵1　「青渦巻国は全軍を挙げて、只今こちらに向かい」

青渦巻の兵達、客席より行進。
照明、暗く落ちていく。

太鼓の音、ＯＵＴしていく。

溶明。
長官が浮かび上がる。
横で船長が船を漕いでいる格好。
舞台上はあらゆる色の兵達が倒れた山となっている。
その中に、姫や皇子の姿もある。

長官　「やがて戦は終わりました…。
多くの民が死に、それぞれの国が甚大な被害を。
けれど、火種が消えたわけではありません。
今はお互い自国の傷を癒すため、小康を得ただけのこと。
けん制をしあう日々は続きます。
いつの日か、再び誰かが争いの炎を上げるやも…。

（間）

赤渦巻国は滅びました。
結局、戦に加わり、なす術もなく…。
かつて和を唱えた豊かな国が、この国から姿を消したのです…」

赤長　赤渦巻長、ボロの身なりで舞台上をよろよろと横切る。
「皆は…どこへ行った…。
皇太子は…皇子は…。
海か…あの渦の中へ」

長官　「僕は生き残りました…。
戦の語りべか…和の伝道師か。
いずれにしても、これから先の生き証人には違いない。
ただ、僕は確かに聞いた。
互いの国の様々な音が、美しく重なり合ったあの一瞬を」

死者達がゆっくり立ち上がっていく。
彼らは、それぞれの楽器を奏で始める。
姫、長官に笛を渡され、死者達の音楽に加わる。

長官　「リボンを捨て去り、波に放ったあの音は、
互いの音を受け入れて、重なり合うことが出来たのです。
しかし、戦はなくなりません。
姫と皇子の葛藤は、これから先も続くでしょう。
時代を変え、形を変え、国を変えても…。
さて、生き証人は行くとしよう。
あの日、重なり合った和のしらべを皆に伝えに…」

長官、笛を吹く。
船長、船を漕ぎ続けて。
死者達の音が重なり合っていく。
それぞれの国の旗を振る兵達。
やがて、幻のような霧に消えて。

(since 2002)